

三 社会のために役立つ喜びを【公共の精神 C (14)】

岩元悦郎

岩元悦郎は、一九三七年、私立帯広盲あ院の開設、帯広盲学校の初代校長への就任、札幌ライトハウスの設立など、九十二年間の長い人生を、障がい児教育に注ぎこんだ人物です。



〔「ほっかいどう百年物語」より〕

悦郎は、一九〇七年、上川支庁南富良野村（現在の空知郡南富良野町）で生まれました。生まれつき、視力が弱い子どもでしたが、悦郎は、不自由を感じていませんでした。

小学生のころ、黒板の文字が見えないと、先生が小さな黒板に書き直して持ってきてくれたり、ふぶきの日には、友達が風で飛ばされないよう心配して、取り巻くように送ってくれたり、周りの親切を身をもって感じながら育ちました。「大人になって手術をしたら、かなり見えるようになる。」と札幌の眼科医から言われたことで、将来への希望をもつことができ、目の不自由さが苦にならなくなりました。

しかし、一九二五年、十九歳の時に札幌の眼科に入院し、

何度も手術を重ねましたが、失敗に終わり、わずかに読めていた本の文字まで見えなくなってしまいました。悦郎は、くやしきで、

「どうしてこんなふうに産んだんだ。」

と言つて、母親を責めたこともありました。

悦郎は、二十一歳の時、小樽の親せきに、小樽盲あ学校への入学をすすめられました。初め、悦郎は断りましたが、しきりにすすめられたため、入学を決心しました。

小樽盲あ学校で、最初に先生に一枚の紙を差し出されました。指でさわると蚕の卵のような感じしよくでした。先生は、「これが点字というものです。これからはこれで勉強します。」

とやさしく言いました。

これが悦郎の点字との出会いでした。

悦郎は点字に興味をもち、数日で点字の本を読めるようになります。

その後、東京盲学校で教師の資格を取り、二十九歳の時、母校の小樽盲あ学校に教員として帰ってきました。希望に燃えて教師となり、子ども達のためにがん張ろうと思った悦郎

でしたが、教師として毎日がんばっても、「盲人は世の中で必要とされない者」だという思いを消すことはなかなかできませんでした。

一九三七年、教師生活三年目に入るころ、悦郎は菅原ヒデと結こんしました。ヒデは、*口話法を学んで言語障がい児の教員をしていました。

そのころ、道内には盲あ者のための学校は、札幌や函館など五か所しかなく、道東にはありませんでした。そのため、悦郎は、

「目や耳の不自由な子ども達に勉強を教えることができれば、社会のために役立つ人生になるのではないだろうか。」と妻のヒデに話すと、賛成してくれ、一九三七年四月、全く知らない土地、帯広へとおもむきました。

一人の知り合いもない帯広でしたが、一けんの家を借り、「帯広盲あ院」の看板をかかげました。

授業料や学校の設備、教科書等の費用を全て無しとうとしました。それらの経費をまかなうため、午前中の授業が終わると、悦郎は、午後はあんま、はりきゅう、マッサージの治りようをして仕事にはげみました。

学校を開設した直後に、日中戦争が始まり、生活は苦しくなるばかりでした。それでも、悦郎は、信らいて子どもを預けてくれる親達のために、

「どんなことがあっても、学校はやめないぞ」と自分に言い聞かせました。

終戦後、教育制度の改革が行われ、私立学校に対する基準が厳しくなり、帯広盲あ院がそれらの基準を満たすことは不可能に近くなりました。一九四八年、いよいよ閉さかと覚

ごしていた時、日本の障がい者の福祉向上を目的に来日したヘレン・ケラーが北海道の各種し設を視察することになりました。北海道教育委員会は、それを記念して、私立の盲あ学校を公立にすることにしました。こうして、同年十月一日、帯広盲あ院は道立帯広盲あろ学校に生まれ変わり、閉さすることはなくなりま



「帯広盲学校の運動会で、生徒に賞品を渡す岩元校長」
〔「ほっかいどう百年物語」より〕

した。

悦郎は、帯広盲学校の校長、妻のヒデはろう学校の教師となり、夫婦になって初めて給料を手にし、働いて得る賃金の大切さを改めてかみしめました。

校舎や体育館が改築されるとともに、教師や児童・生徒も増え、帯広盲・ろう学校は順調な発展を続けました。

その後、悦郎は、札幌盲学校に転任しました。

一九六九年三月、小樽、帯広、札幌で勤めた三十四年間の教師生活に終止ふを打ちました。

悦郎は、退職後、自身の経験を生かし、

「目の不自由な人々のためになることは何だろう。」
と夫婦で話し合った末に、図書館を設立することを決心しました。

当時、図書館は全国で四十か所ほどありましたが、点字本は大変少なかったのです。悦郎は、退職金で盲人のための福祉施設である「札幌ライトハウス」を設立しました。

札幌ライトハウスでは、道内各地からの希望に応じて、点字本やテープを貸し出す活動を行いました。その他にも、市からのまれた仕事としてタイプライターや時計等の貸し

出し、つえ・点字機等の盲人用具の取りまとめ等も行いました。

悦郎とヒデは、ライトハウスで、朝から夜まで無報しゅうで働きました。無報しゅうにもかかわらず、二人はライトハウスでの活動が少しも苦になりませんでした。全国から貸し出し本に対する感想文が送られてくることで、仕事に生きがいを感じていたからです。

一九九八年の暮れ、悦郎は、息を引き取りましたが、障がいがあっても、十勝の厳しい寒さにたえながら学習にはげみ、力強く生きぬいていく児童生徒を育てるといふ悦郎の思いは、今も帯広盲学校の教師達に引きつがれています。

*口話法・・・ちよう覚障がい者に対して、話し手の口の動きや表情を読み取る読話、正常な発音器官を訓練しての発語の手法のこと

◎ 悦郎が、障がいのある人々のために生がいをつくしたのはなぜでしょう。

◆ 今まで、自分が働いたことで他者の役に立った経験はありますか。